

レシピ Kizuki 作り方

出雲野菜の煮びたし

- ①つけ汁は、だし汁10 醤油1 砂糖0.5の割合で合わせる(煮たたせ さましておく)
- ②出雲野菜をベーコンと共に炒める
しんなりして色が出たら冷まして①の出し汁につける

欧風玉子焼き

- ①玉子6コにみじん切りのウインナー、牛乳90cc、塩、さとうを入れて混ぜ合わせる
- ②①を玉子焼き器で焼く

もずく酢

- ①つけ汁は、出汁5 さとう1 酢2の割合で合わせてわかに冷ます。
- ②もずくを緑色がでるまでさっと湯でて冷水にとり①につける

鯛のフライ

- ①鯛をおろして食べやすい大きさに切り、水200g 塩5g 砂糖5gの液につけこむ(下あじを付けふくら仕上げるため)(30分)
- ②①の鯛に小麦粉をまぶし玉子を付けパン粉を付け揚げる

めのはのおにぎり

- ①じゃこをゴマと共に少量のサラダ油でさっと炒める
- ②①に白ごはんと板わかめを混ぜる
- ③②をおにぎりにする

鯉のおみそ汁

- ①鯉をぶつ切りにして圧力鍋でやわらかくする(3時間)
- ②①に適量の出し汁を加え、みそ汁にする

ぜんざい

- ①あずきをもどす(2回～3回湯でこぼしてあずきが柔らかくなるまで茹でる)
- ②①にさとう、塩を入れ味をととのえる

「大社の史話 第 53 号 大社史話会発行(S59.9.15)」より引用

■ヘルンと杵築 梶谷 泰之

いま一つヘルンを不思議がらせたものがある。小野宮司家で歓待を受けた。御馳走の中に「私は一つの珍異な料理をいつまでも忘れがたい。はじめはほうれん草かと思いきがいをしたが、海草を味よく調理したものであった・・・苔の如くせんさいで珍稀な種類である」と。これはいうまでもなく水雲であった。(4 頁)

■ヘルンの初詣 島 洋之助 遺稿

風呂からあがると、夕食のぜんがはこばれてきた。卵やきと、鯛のフライは、彼をほほえませた。(7 頁)

■思い出のヘルンさん 中 鶴喜代 口述

養神館の前に来た時に、お酒が飲みたいという動作をされます。あいにく財布を持っていませんでしたが、借りてでもおこうと思い、二階の東の間に案内しました。突然のお客で、ごく簡単な料理が出ました。盃洗に生卵が盛ってありましたので、給仕された佐藤勘右衛門（いなばや主人、養神館経営者）の母に頼んで、二つ三つ割って小皿に入れ、醤油をかけてもらってすすめましたところ、おいしそうに食べられ、お互いにお酌をしながら、しばらく飲んで養神館を出ました。(19 頁)

当時千家様には毎夏稲佐浜の関屋の西方に、組立式の御座敷をもうけ、ここで避暑海水浴をなさる例になっておりました。ある日、宮司、管長のお二方がちょうどその頃養神館に家族と共に滞在中のヘルンさんをお招きになりました。御馳走の料理人は安井熊市という看雲楼主人で、日本酒、鯉の糸づくり、半べんと鯉の味噌汁、オムレツ、酢の物、果物などであったように記憶しております。(19 頁)

■宇家タニさんにヘルン先生の思い出を聴く テープと実話の聞き書 小村 尚司
O「ここで泊られると、いろいろな料理が出されますね、ヘルンさんはゆで卵や魚も食べられましたか。」

T「ハイなんでも食べられました。魚などは、おいしい、おいしいと言って食べられました。日本人になろうという気持ちがいっぱい、なんでも食べて見たかったと思います。」(24 頁)

小泉八雲と大社の関係年表（『大社の史話53号』より抜粋）

明治23年	9月13日	杵築いなばや投宿。夕食後、宿の主人と大社参拝
	14日	出雲大社に昇殿参拝、宝物拝観、千家邸訪問の後、佐々鶴城の案内で稲佐浜に行く。
	19日	ヘルンより宮司に礼状を送る。
明治24年	3月31日	千家尊紀宮司より燧臼燧杵および神符を贈られる。
	7月26日	西田千太郎とともに稲佐の養神館に投宿
	27日	海水浴を楽しむ
	28日	大社に参拝、セツ夫人来町して参加
	29日	西田とともに昇殿参拝、千家邸に招かれ古文書、書画等を見る。丁重なる饗応を受ける。
	8月4日	千家宮司に招かれ、豊年手踊（盆踊）を見る。この日を中心に天神祭、巫女舞、越峠荒神社、連歌寺等を見て、水泳を楽しむ。
	7日	船に乗って日御碕神社に参拝。セツ夫人、西田とともに小野宮司邸にて優待を受ける。
	9日	佐々鶴城を養神館に招いて神道故実等について質問懇談する。
明治25年	1月10日	ヘルンより宮司宛賀状、23日宮司より返信
	3月11日	ヘルン所蔵の雑誌を宮司に送る。
	6月20日	「杵築—日本最古の宮殿」（西田訳）を「風潮新誌」1号より連載発表（6号まで）
	11月8日	大社保存会へ金5年を寄付、博多織を贈られた礼状をヘルン宛に送る。
明治26年	1月1日	ヘルンより宮司宛年賀状を送る。
	1月5日	宮司よりヘルン宛年賀状を送る。
明治27年	1月5日	宮司より年賀状を送る。
	4月	宮司より祖先着用の黒袍と和歌の色紙を贈る。
	5月16日	ヘルンより宮司へ礼状を送る。
	10月1日	著書「グリンプシス」をアメリカの発売元より宮司に送る。
	11月	「ヘルン氏の見聞録」（西田訳）を風潮新誌に連載発表（30号～39号）
明治29年	4月10日	ヘルンが日本へ帰化し、小泉八雲と改名したことを宮司に報告。
	8月11日	八雲夫妻、一雄、西田とともにいなばや投宿

- 12日 出雲大社参拝、千家邸訪問、稲佐の養神館に移り、毎日水泳を楽しむ。
- 14日 千家宮司の稲佐休憩所に招かれ饗応を受ける。
- 16日 謝礼、告別のため西田とともに千家邸訪問
- 12月29日 宮司宛書簡（菓子のお礼、東京生活の様子、佐々神官に再会したい）
- 明治30年 1月16日 八雲宛書簡（白羽二重を贈られたお礼、今夏再び来遊を待つ、西田氏佐々とともに料亭で語りたい）
- 明治31年 6月16日 八雲宛書簡（6月16日の誕生日に巻たばこ入を贈る。）
- 明治32年 9月13日 宮司宛書簡（八雲邸訪問に対する礼状、神楽絵図1巻、団扇を献呈する。）
- 明治35年 2月 4日 八雲より白紋羽二重一疋を贈る。
- 11日 宮司より礼状
- 4月29日 宮司より和布を贈る。
- 明治36年 1月 5日 八雲より宮司宛年賀状
宮司より礼状（寒ぶりの塩漬と糍漬、菓子を贈る）
- 大正12年4月 長男小泉一雄、出雲大社に参拝
- 昭和25年 6月25日 大社温故学会「ヘルンと大社」を刊行。行楽館にて「ヘルンを偲ぶ夕」を開催。 ※八雲生誕百年
- 6月29日 次男清、夫人、令嬢とともに出雲大社参拝、いなばや宿泊。
- 昭和29年 9月26日 大社ヘルン会「ヘルンと大社」を再刊行。
「いなばや」において、50年忌慰霊祭後、「ヘルンを語る」座談会を開催。
- 27日 小泉一雄夫妻、孫時氏を「いなばや」に招き、八雲の遺墨遺品等12点を陳列公開して懇談する。
- 昭和38年 6月 4日 宇家タニさんにヘルンの思い出を聞く会を開催。
- 昭和41年 9月26日 「いなばや」において、ヘルン忌集会を開く。
- 昭和58年10月27日 「いなばや」にてヘルンを偲ぶ会を開く。「日本の面影」撮影について懇談
- 昭和59年 7月19日 「いなばや」にてヘルンを偲ぶ会、NHK放映の「日本の面影」のビデオ鑑賞。
※小泉八雲80年忌

小泉八雲に関する投稿（『大社の史話』より）

①第10号（昭和50年12月）

○ヘルンの見た杵築の豊年踊（P5～P10） 梶谷実

②第15号（昭和51年12月）

○ヘルンと大社（P2～P9） 中和夫

③第17号（昭和52年4月）

○竹中さんとヘルン（P20） 米井剛

④第18号（昭和52年6月）

○いなはや旅館とヘルン（P33） 編集部

⑤第53号（昭和59年9月）

◆小泉八雲特集（小泉八雲逝去80年忌）

- | | |
|----------------------|---------|
| ・「小泉八雲特集」の発刊されるに当って | 千家尊祀 |
| ・ヘルンと杵築 | 梶谷泰之 |
| ・ヘルンの初詣 | 島洋之助遺稿 |
| ・小泉八雲と大社 | 中和夫 |
| ・松江の小泉八雲・幼い記憶 | 石村禎久 |
| ・劇「湖畔の夜」の思い出 | 佐貫吉孝 |
| ・追想 小泉一家の思い出 | 白築祐久 |
| 思い出のヘルンさん | 中鶴喜代 口述 |
| ・「大社町弘報」より | 編集部 |
| ・宇家タニさんにヘルン先生の思い出を聴く | 小村尚司 |
| ・小泉八雲と大社の関係年表 | 編集部 |

⑥第55号（昭和60年2月）

○宇家タニさんを偲ぶ（P3～P5） 大谷従二

○ヘルン先生と私（P5～P） 宇家タニ

⑦第139号（平成16年6月）

○没後百年に当たって

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）と大社（一）（P34～P37）

出雲大社参拝（日本瞥見記 - 杵築から） 村上清子

⑧第140号（平成16年9月）

○没後百年に当たって

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）と大社（二）（P35～P39）

出雲大社参拝（日本警見記 - 杵築から） 村上清子

⑨第141号（平成16年12月）

○没後百年に当たって

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）と大社（三）（P33～P37）

日御碕（上）（日本警見記 - 日ノ御碕から） 村上清子

⑩第142号（平成17年3月）

○没後百年に当たって

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）と大社（四）（P37～P39）

日御碕（下）（日本警見記 - 日ノ御碕から） 村上清子

⑪第156号（平成20年9月）

○出雲大社本殿拝観とラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の昇殿について
（P20～P25） 村上清子

（注）『大社の史話』（大社史話会発行）、創刊は昭和49年1月15日
現在、222号（令和7年3月）まで刊行。